

NEW
FOOTBALL
DREAM
Yusuke ONISHI

06

関西サッカーリーグでもひととき目を引く190cmのFW、アルテリーヴォ和歌山の大西佑亮選手。愛称「ジャンボ」。鹿島アントラーズユース・専修大学を経て、故郷に帰ってきた。2年目の今季はエースナンバー『20』を背負ってチームを牽引し、得点ランクでも単独首位*に立っている。目指すはJリーグ。自身の夢とチームの夢は同じ場所にある。*第10節終了時点。

Text by. Kaori MAEDA
Design by. KATSUMI



このチームだから、
サッカーを好きでいられる。



©ARTERIVO WAKAYAMA

ARTERIVO
WAKAYAMA アルテリーヴォ和歌山 FW 20 大西 佑亮 選手



サッカーでの出会いがなければ今の自分はない。

アルテリーヴォ和歌山に加入した理由は？
「大学卒業後もサッカーを続けたいと考えていたときにアルテリーヴォの存在を知りました。どうせやるなら地元、和歌山にJクラブを誕生させる力になりたいと思って、入団を決めました。それに関東でプレーしている間、家族に心配や負担をかけてきたので、少しでも安心してもらえるよう近くにいたかったです」

アマチュアの地域クラブでプレーすることになった理由は何ですか？
「Jリーガーになりたい」という夢は高校生の頃から持っていました。簡単にないこともわかっていました。ほくは鹿島アントラーズユースからトップチームに上がれなかった経験をしています。それからアマチュアでも、昇格していけばプロになれると思っていたので、抵抗はありませんでした」

ずっとJリーガーになることを目指していたのですか？
「いえ、大学時代にサッカーから気持ち離れた時期があつて、卒業したら就職しようと思っていました。でもそんなほくを叱咤する同じサッカー部の親友がいて、おまえはもつとやれる。なんでやらないんだ！ って言い続けてくれたんです。彼がいなかったら、今の自分はない

チームメイトにも恵まれて、サッカーを楽しんでいるようです。
「アルテリーヴォじゃなかったらサッカーを続けられなかったかもしれない、サッカーを嫌いになつていたらかもしれない。このチームだからサッカーが好きでいられるんです。今とても充実しています。和歌山に帰ってきてよかったと思っています」

ではサッカーの環境はいかがですか？
「ほくはユース時代を鹿島アントラーズで過ごしています。Jクラブの環境を知っています。やはり今の環境はまだです。でも、Jクラブも最初から整つていたわけではないでしょう。アルテリーヴォも少しずつよくなっています。地域の人と力を合わせて行けば、もっとよくなる可能性だってあります」

和歌山でJリーグの試合を観られるのが楽しみです。
「ほくがゴールすればチームは勝つでしょう。勝ちを重ねれば上に進むことができます。そうやって昇格していけば、Jクラブになる。というチームの夢と、Jリーガーになる。というほくの夢も叶えられる。みんなと一緒、に夢を表現したいですね」

かつたですね」
仲間に恵まれていたんですね。
「アルテリーヴォに来てからもそうなのですが、サッカーを通じていい出会いをして、たくさん恩を受けてきました。サッカーの恩は、サッカーを通じて返していきたいんです。今はアルテリーヴォをJリーグへと上げるのが、ほくにできる最大の恩返しだと思っています」

子どもたちの身近なところにサッカーを。
和歌山でのクラブへの関心はいかがですか？
「最近ほ地元メディアに取り上げてもらえていますし、応援してくれるファン、サポーターも増えています。とはいえ、和歌山は高校野球が盛んな地域でサッカーよりも野球の方が人気。ほく自身も野球少年でした。友だちが誘ってくれなければ、サッカーをやつていなかったと思います」

Jリーグも身近ではなかった？
「なかったですね。だから地元のサッカー教室に当時カンパ大阪だった新井場選手が来てくれたときはとてもうれしくて、今でもそのときのことを覚えています。子どもの頃の出会いは大切ですよ。近くに感じられる、地元クラブの選手がJリーグを目指して力いっぱいプレーしている姿を目の前で観れば、夢に向

かつてがんばることの大切さを感じてもらえるんじゃないかと期待しています」
子どもたちとコミュニケーションを取っているのですか？
「スタジアムや地域のイベントで交流していますし、サッカー教室でふれあうこともあります。ほくは身長が高いし、ジャンボという呼びやすいニックネームもあるの子どもたちにすぐに覚えてもらえるんですよ」

スタジアムでもジャンボコールがありますよね。
「しっかりと聞こえています。でも、試合中に反応できないので心の中で手を振っています。笑。こうやって子どもたちに応援してもらえるとうれいし、もつとがんばらないといけないと励みになります。これからもいいプレーが見せられるよう努力して、サッカーを通じて和歌山の子どもたちに夢を与えられる存在になりたいですね」

